仏像と人物肖像の顔造形における仏性表現の比較数量解析

Comparative numerical analysis of the Buddhist facial expression in Buddhist sculptures and human portraits

小林茂樹 [1)]、長田典子 [2)]

Shigeki KOBAYASHI [1)], Noriko NAGATA [2)]

E-mail : kobayashi@keisolabs.com

和文要旨

仏像の製作は、1 世紀末に現在のインド・パキスタンで発祥した後アジア各地へ伝播し、各地・各時代で多様な造形を展開した。仏像作家は、悟りの境地に到達した仏陀を表象化するために、人間とは異なる造形を創造してきた。私たちは、この多様な造像様式の計測的かつ統計的な分析を追求している。このような仏像の異形の造形を明らかにするために、平安期から鎌倉期にいたる慶派仏師の作になる仏像と人物肖像の顔造形の相違について、顔部品の配置や、顔部品自体のサイズの相違につき、特徴パラメータを用いた数量解析を行った。相貌学顔高に対する前額高、鼻高あるいは鼻域高、下顔高、および耳最大長それぞれの比率と、顔最大幅に対する眉毛部幅、外眼角幅、鼻幅、および口裂幅それぞれの比率とを、顔造形特徴パラメータとして採用した。慶派作家の仏像 24 標本および人物肖像 10 標本からの数量データを比較した後、さらに平安期近江地方の観音像 28 標本と奈良期から江戸期にいたる人物肖像 11 標本からの数量データを比較した結果、仏像標本は、人物肖像標本に比して、著しく小さい前額高と、大きな鼻高あるいは鼻域高と、著しく長大な耳長が特徴であり、またより大きな眉毛部幅と外眼角幅を持ち、より小さな口裂幅を有することが判明した。これらの結果は、慶派作家の手になる仏像においても、また平安期近江の観音像についても、同様であった。これらの仏像顔造形の特徴のうち、長大な耳介以外は、儀規に記載されなかった仏像の特徴であり、本研究においてはじめて、その数量的な相違が明らかになった。

キーワード : 仏像、人物肖像、顔造形、特徴パラメータ、クラスター分析

Keywords : Buddhist sculpture, human portrait, facial configuration, feature parameter, cluster analysis

1. はじめに

彫刻や絵画によって仏の姿を表現する動きは、釈迦滅後約 500 年を経た 1 世紀末ころから、始められたとされている。仏の姿には、普通の人が悟りを得て特別の存在になったことを表出しなければならない。「仏像は人に似て人に非ず」という言葉のとおり、仏陀が単なる人ではないことを表現するために、全身の肌を金色に覆うとか、手指の間に水かきのような膜を作るなど、一見それとわかる「異形性」の表現を加えてきた。

ここでは、仏像の顔造形について、仏性表現に関する数量的な解析を試みている。

2. 目的

本研究は、仏像と仏教界における人物肖像の顔造形について数量的な比較解析を行い、仏像の顔に特有な仏性表現の特徴を明らかにすることを目的としている。まず慶派作家の仏像と人物肖像を比較解析して、慶派において人物肖像と異なる仏像の特徴パラメータを特化し、次に慶派以外の仏

[1)] 形相研究所、Keiso Research Laboratories
[2)] 関西学院大学理工学部、School of Science and Technology, Kwansei Gakuin University